

(会議要旨)

第2回札幌市歴史文化基本構想策定委員会

平成30年6月25日(月) 10:00～

札幌市役所本庁舎地下1階 3号会議室

次 第

- 1 文化財に関する国の動き(講演)
- 2 前回会議・スケジュール等
- 3 文化財把握(調査)の方針について
- 4 関連文化財群・ストーリーについて

開 会

1 文化財に関する国の動き（省略）

2 前回会議・スケジュール等

■前回振り返り

関連文化財群のストーリーについて、この委員会で決めた上で、調査、把握等も並行して進めていくという方針のストーリー志向形ですすめていきたい。

札幌市内部で関連する施策や計画を所管している関係課による関係課長会議を別の組織として発足した。先日第1回会議を開催し意見交換や情報共有を行った。札幌市の景観計画の中で、今年度、活用促進景観資源に関する検討がなされているが、現状変更などの制限や助成制度がないという従来の支援制度とは異なった景観資源を緩やかに位置づける制度であり、歴史文化基本構想で取り扱っていく広義の文化財というものと考え方が重複するところが大きい。

関係課長会議については、今年度2～3回の開催を予定している。

○羽深委員 資料1の条例策定準備とあるが、歴史的建築物だけの条例をつくるという意味か。

○事務局 歴史的建造物について建築基準法を適用すると、それらを活用するときに規制が多いことから活用を促進するための条例について、今年度検討すべき内容として盛り込んでいる。

3 文化財把握（調査）の方針について（資料2）

1 文化財把握の方針

（1）対象・把握の考え方について

対象については、札幌市に存在する文化財を、指定、未指定にかかわらず、地域にとって大事なもの、失いたくないものなどを含めて幅広く捉える。また、本構想においては、指定・登録等の有無や文化財保護法の類型にとらわれない、地域にとって大事なものを含めた広義のものとして「文化財」という言葉を使用するという定義づけを行った。

把握の考え方は、ストーリー志向型という考え方から、2段階で情報収集していく考え方で整理。札幌市には多くの文化財が存在するため、大前提として、地域にとって大事なもの、失いたくないものは幅広く把握する。同時に、札幌らしさ、地域らしさを特に物語るものについては積極的に把握していく。

また、文化財把握の際には、自然環境や周囲の景観、歴史資料や伝承など維持継承するための技術、文化財を支えている人々の活動などの周辺環境も含めて把握に努める。

（2）文化財の分類方法等

これまでの文化財行政の中の6類型等も参考にしながら、総合的に把握整理できる新たな

な分類の項目を設定する。データの整理については、ストーリーをつくりやすいように地域特性なども考慮した項目設定や、将来的なデジタルアーカイブ化などもある程度考慮していく。

<新たな文化財分類のイメージ>

全てのもが入るように、存在の仕方というような捉え方で大分類を不動産と動産に分類。中分類は不動産については実物要素として実際に目に見えるもの、空間要素として地図などで把握できるもので大きく分類。動産については有形要素、無形要素に分類し、全てのもが入るような枠組みとした。小分類は、これまでの分類の項目や今後集まってくると踏まえながら、今後精査する。また、今後ストーリーづくりをするときに関連するキーワードを見つけやすくすることを考えている。

2 調査の概要

これまでの文化財の調査について概要等を整理し、随時追加するなどして、整理する。

(1) 文化財募集市民アンケート

- ・WEBアンケートによる市民アンケートを実施する。なるべく効率的にこれからの議論にも使えるよう、8月中旬ごろにWEBアンケートを実施する予定。
- ・札幌市ホームページや区役所、まちづくりセンターでも同様のアンケートを実施する。
- ・連合町内会アンケートも実施を予定。札幌市内にある連合町内会から地域一推しの文化財を問うアンケートを募集して、11月23日に開催するシンポジウム等のイベントで掲示して紹介するようなことを想定している。
- ・これらは文化財収集の一つとなるとともに、全市的、網羅的なPRを兼ねている。

(2) 郷土資料館へのヒアリング・アンケート

- ・郷土資料館の管理人などに、地域の特徴をよく物語っているものについて選んでもらい、その理由等を聞くという形のヒアリング・アンケートを想定。

(3) 市民ワークショップ

- ・3回ほどのワークショップと現地調査を行い、シンポジウムにつなげるという一連の取り組みを想定。これも文化財を収集の一つとなる。

○羽深委員 文化財として指定されている大友亀太郎の関連資料や開拓使文書はもともと行政文書であるが、今回は行政文書の取扱いはどうなるのか。

○事務局 それらの類も、今回の把握の対象とする文化財に入る。

○往田委員 ここでの文化財とは、現存しているものを指すのだろうが、もう既にもないもの、紛失されているものというものも数多くある。それに関して、ここの土地にこういうものがあったという歴史は、子どもたちや市民にも伝えていってほしいと思う。現存していないものについても何らかのアーカイブがあってもいい。

○甲地委員 何かをリストアップするいうときに、ここで言うところの不動産、あるいは

は動産の有形要素になっているものは比較的挙げやすいと思う。一方無形文化財というのは、物ではない段階で、人がいないと継承されないもの、そういう意味では最新の文化であり続けるもの。そういったものの把握について、ここで書かれているものだけを見る限りでは、古くから伝わってきたというものが対象になっているような気がする。

例えば札幌市ならでは、近年、10年、20年ぐらいは続いているような特徴ある行事などもあるので、そういったものも視野に入れて考えるべきではないか。むしろこれから継承するという未来志向のものを考えたときに、無形文化財の把握や対象というものはもう少し広げたほうがいいのではないかと思う。

○往田委員 お祭りというのも、古くから伝わるお祭りと近年出てきたお祭りがあるが、近年出てきたものの中には、過去の歴史を踏まえてここでお祭りをしようというような経緯からできていったというものもあると思う。そのような年数は経ってなくても歴史・文化を継承するものとして、また、町並みや建物、人などを絡めての継承ということも伝えていく、ということを考えてもいいのではないか。

○西山副委員長 あるお祭りが生み出されるための歴史的な経緯、ストーリーとか歴史的事実とか、それ自体は動産の無形要素であり、場合によってはそれが古文書に残っていたりする。また、その祭りが展開するために必要な広場や通りなど、日ごろはただの広場や通りがあるとき特別な空間になる。また、古い建物や鳥居などの具体的な、ここで言う実物要素や空間要素と結びついている。これらが無形要素も含め総合的な存在としてあるといった場合に、セットとなって把握すべき、というのが今お二人の委員がおっしゃった考えだと思う。

「周辺環境も含めて」という記載があるが、この周辺環境というのは周辺の空間のことだけではなくて、支えている人とか技術なども含むもの。歴史文化基本構想ではそのような意味で取り上げられ、無形というものとして突き放さずに、もっと有形や空間や動産、不動産を含んだ総合的な存在として、そのイベントなどが説明できるようになる。それを踏まえ、こういう建物や空間は維持していこうとかいう様な話になっていくと、人の暮らしが豊かになってくると思う。

そういう意味では、この歴史文化基本構想の中で物語っていく、リストアップしていくということが大事であり、それが関連文化財群というものなのだろう。事務局で提案している関連文化財群はかなり大きなストーリーだと思うが、例えば、ある場所のあるお祭りが一つの関連文化財群として取り上げられても構わないと思うし、その辺を柔軟に取り組める考え方にしていってほしいと考えている。

先ほど事務局から景観部局の活用促進景観資源について触れられたが、これは今回、景観計画の中で新たにつくられた登録制度であり、まさに景観資源となるもの。

事務局では文化財分類の中分類で実物要素という言葉を使っているが、他の自治体では、景観要素と呼んでいるところもある。ここで実物要素と呼んでいるものについて、実際には建物、樹木、石垣、水路の護岸などのようなものを入れていくのであれば、一つの

提案として、この名称を景観要素としておけば、後で景観行政との親和性がよくなるかなと思う。

○角委員長 例えば若者文化がつくっていた「オヨヨ通り」や裏参道という通りがある。そういうものも実は、ある時期の一つの札幌の若者文化の発信ではないか。そのようなものも拾っておくと、札幌のまちの中で若者たちがさまざまな形で仕掛けたという一つの行為のようなものが歴史的な背景として出てくるのかなと思う。それを全部拾っていくと結構大変だが、まちの発展と若者たちとの接点の仕方というのも、もしかすると、札幌らしさと関わってくるのかもしれない。

○樋口委員 今までの話から、文化財の対象がかなり広がるという印象。例えば地域のグルメだとか、そういったものも含めて、これは地域の大事なもの、大切なものということになれば、例えば札幌だとラーメンだとかジンギスカン、そういったものを含めて捉えていくというような考え方となるのか。

○事務局 それをどういうふうに分類したり整理したりしていくかは今後の作業になるが、一旦、今はそういったものも含めて拾っていく方向。

○樋口委員 そうすると、やっぱり市民アンケートのキーワードなんかもうちょっと幅広く設定をしていったほうがいいのではないか。

○角委員長 アンケートのキーワードはランダムに書かれているが、もっとたくさんのもので考えられることは事務局でも認識してはいる。いろいろなものを挙げ出すと、きりが無いという中で出てきたもの。食については、ビールだけかとか、タマネギだけかというような話もあるが、絶対、札幌を語るときにこのワードが入っていたほうが良いというのがもしあれば、出していただければと思う。

○西山副委員長 今のラーメンの話から。例えば札幌ラーメンというものをもし挙げたときに、札幌ラーメンというものは一体何かと。要するに、何がどうであったら札幌ラーメンと呼ぶのかという、歴史があり、その中でどこかで派閥が分かれたりしているはず。本来の文化財的アプローチでいけば、正調というか正しいものを見出して、それを登録する。堅い話となるが、できれば専門家や市民も含めて一度は議論をちゃんとして、現時点で、札幌ラーメンというのはこういうふうで定義され、これが市民の愛する遺産であるとして登録するということもありえる。ただ、キャンペーン的に、いろいろな民間事業者が集まってくると何をしているかわからなくなる。そういうことから、他の自治体の例では、ある「郷土料理のレシピ」ということで、それを遺産として登録していくということをしている。

今のは極端な例だが、要は、文化財行政がやる以上は、ここには一番正統な価値づけがなされ、それを観光や教育、景観などに使っても、札幌市がどんどん本物になっていく。ただしそれを、先ほど言ったように証明できるものしかやらないとなったら途端に狭くなってしまいますので、両論を併記するなどしていきながら、現時点でのその価値の説明のベストを記録して行って、登録していく。将来もっと正しいことがわかれば、それを改定し

ていくというような、そういう現代性を持たせながら、なるべく排除しないようにしていきたい。そうすると、例えば観光振興のサイドがそれを使うときに、やはり、おもしろい使い方ができるのではないかと思う。その辺の運用の仕方を上手にすると、今まで文化財などに興味がなかったような分野の方々も使いこなせるのではないのか。その結果として、残っていくとか磨かれていくということになるのかと思う。

○角委員長 今、西山先生が大事なことを言われた。やはり歴文構想なので、その部分の歴史的な背景だとか、そういうものをきちんと説明できるようなものというふうに、ある程度枠を決めておかないと、どんどん無限に広がっていくということになる。

その辺も考えながら、アンケートに出てくる語句というのはなかなか、皆さん挙げ方が違ってくと思うので、今ここで個別に聞いていくと、多分きりが無い。もしこのような聞き方があるのではないかというようなことがあれば、後で事務局のほうに直接お話ししていただきたい。

ワークショップについてはいかがか。

○樋口委員 ワークショップではないが、市民アンケートのとり方として、WEBでとっていくということだと思うが、WEBが使えないから紙で出したいとかというものに対して対応ができるのかどうなのか。

○事務局 WEBアンケートについては、なるべく早く集めつつ、ワークショップの募集案内も兼ねる意図がある。そのほか、札幌市のホームページや区役所、まちづくりセンター等にも同じような内容のものを紙ベースで実施する予定。

○樋口委員 商工会議所にも観光ボランティアの組織があって、百何十名の方が登録していて、割とそういう歴史についても関心のある方が多い。アンケートの対象として、もし必要であれば御協力したい。

○甲地委員 話が前に戻るが、確かに把握すべき対象を広げていくときりが無いというところを踏まえつつ、歴史背景をきちんと説明できるものという、そのとおりだと思う。そういうふうにして考えていくと、その地域にある歴史的なもの、文化的なもの、その地域にある財産と言えるもの全てを対象とし、その有効活用を図るという、目指すものは最終的には違うのだろうが、ジオパークの考え方と何か似てきてしまっているような気もする。当然重なる部分はあると思うが、その辺の考え方の違いや共通点なども一応踏まえたほうがいいのかという気がした。

○西山副委員長 まさにそう。世界遺産という、日本で言うところの国宝とか重文を選ぶようなプロセスの、さらに国際版のような、堅いものがある一方で、ジオパークというのは活用を中心に考えた、やわらかい制度。これはまさに日本国内における、いわゆる従来のトップダウン型の文化財指定制度と歴史文化基本構想の地域における役割のようなものの関係。ただ、ジオパークは扱える対象が歴文ほど広いわけでもないで、そういう意味ではジオパークのストーリーは関連文化財群の1個のようなものだと思えばいいのでは。歴文構想は幅が広く、マスタープランとなるもの。そういう意味で、私はジオパーク的な

考え、登録遺産、記憶遺産などいろいろなものがあるが、そういうものをさらに包括できるものとして、自治体が自然なども含めた歴史文化をキーワードに取組んでいると理解するといえると思う。

4 関連文化財群・ストーリーについて

○事務局 資料3、第4章。札幌市の文化財の特徴を把握する流れを記載。

・札幌市の文化財の特徴

空間的、社会的、時間的の観点から表で整理しキーワードを抽出し、その後のステップとして、調査等で出される文化財を再整理した上で、さらに歴史的、地域社会的関連性の観点、空間的関連性の観点から特徴を整理した。

表の横軸が時間軸で縦軸がキーワードとしている。記載している文化財は例として挙げているもので一旦ここから特徴を導きだし、右の赤丸に示している。

・関連文化財群の考え方

札幌市は広域にわたるため、多面的、多角的な視点によって文化財というものの特徴を捉える必要がある。導き出したキーワードや特徴から、関連文化財群を導くという流れ。

関連文化財群については、歴史的関連性、地域社会的関連性、空間的関連性から見出すものであること、札幌市の歴史文化を物語る上で欠かすことのできない特徴に関連する文化財の集まりであること、今後も継続して市民とともに増やしていくものであることという考え方で整理し、事務局（案）として先ほどの特徴から導き出した七つのストーリーと関連文化財群を設定した。これらについては、今後の調査やワークショップ、委員会での御意見などを踏まえながら検討を進める。

○山舗委員 自然・地形をもとにして、縦軸に時間としてまとめている図表はすごくわかりやすい。それをもとにしてストーリーの七つを見たときに、この流れが途切れてしまっているような気がする。例えばストーリー（1）変化に富む地形～については、現在のイメージが非常に強いが、古代の縄文とかアイヌ文化のところにも関係していると思うので、そこを何かつなげる視点があると、もう少し違ってくるのかなと思う。このように一旦分けてしまうとそれを再統合するのは難しいので、つながれないかな、と思った。

もう一つは、明治開拓以降の（4）、（5）の開拓時代があって、ここまではまだ地形とかなり関わったことが行われているかと思うが、（6）から（7）にいったときに、どの程度その地形とかかわりがあるのか、関係の有無自体や、どんな関係があるかもよくわからない。

札幌オリンピックが大きく札幌市を変えたという点はとても納得できることだが、それと同じようなことが、例えばもう間もなく新幹線が札幌まで乗り入れるとなると、かなり違ってきたりすると思う。札幌という大都市の歴史という点では、ほかの大都市とのオリジナリティの部分がだんだんなくなってきて似通ってきてしまい、観光にも使えるようにすることを考えると、差別化という点でインパクトが弱いかなと思った。明治までの地

形とかかかわっているものと、それ以降のものでキーになるのは、6ページに書かれている島開拓判官がコタンベツの丘から見てまちづくりを行ったということになる。島判官は、ほんの短い期間しか札幌に滞在していないにもかかわらず、その考え方が後々多くの支持を得ており、大通を西何丁目から西1丁目までとし、それは現在の札幌市に至るすごく大きな影響があると思う。例えばその大通ができたキーポイントとなる時期があると思うが、そこと現代とつなげていくということができれば、本当に札幌のオリジナリティーというのが、昔からずっとつないだものができてくるのではないか。そこには目で見たものではないものがある。一見するとよくわからないかもしれない、派手さはないかもしれないけれども、その背景にある壮大なものが札幌市から提示されていて、それでその観光地に行ったときに、もっと突っ込んで見ていこうとか、そういう気になったりするのかなと思う。

北海道の開拓の中で、だんだん札幌市となっていくのだと思う。例えば小樽につながっていたり、いろいろなところにつながっていたのが札幌市になってきたとすると、地形の中では、東西南北でこれだけ特徴があるので、何とか、一番下に書いてある自然と地形は、ただそこに豊かな自然があるよとか、四季でいろいろあるよというだけではないものに使えないか、という感想を持った。

○角委員長 すごく大事なことで、なかなか難しいかなとは思いますが、札幌のまちの発展の中でも中心市街地、例えば碁盤の目であるということも、すごく重要なことだろうと思う。今、山舗先生が言われたように、周りの市町村、特に豊平町との合併だとか、そういうことで、札幌の構造がある時期からずっと変わってきて、様々なものと関連性が出てくる。ただ、どこかですばっと切らないと、このストーリーというのが曖昧になってくる。ただ、本当に札幌らしさみたいなものという、やっぱり真ん中に大通公園があり、もちろん創成川のところも基線になっている。そういうものと現在までのつながりが、もう少しまくストーリーの中でつながってくると、本当に札幌のまちが、このストーリーを見るだけで外から来た人も見えてくることになって、すごくいいと思う。

○甲地委員 アイヌ語地名の話が全然出てこないということと今の話はつながると思って聞いていた。つまり、地形の変化とか長い歴史の中でいろいろ変わっていく中で、島判官がコタンベツの丘から見た、そこで描かれた都市構想というのは、ある意味、それまで培われていたアイヌ民族の文化とか歴史とか、それに沿ってつけられた地名、生活文化に係る地名とか、そこでどういう営みが行われているかというのとは全く別のところから考えられたことなので、二つの視点をちゃんと平等に考える上でアイヌ語地名をどう考えるかというのは非常に重要。これは前回の会議でも指摘されていたことだと思うので、そこはもう少し反映されてもいいのではないかなと思う。

○羽深委員 同じようなことで、資料3の2ページのこの図は、確かに年代的には言えているのだけれども、札幌という地名をどうとるかという話。札幌の広がりとの考えがよくわからない。札幌は、もともとは石狩大府で、札幌本府、札幌区、これは管理所の札幌

区。自治としての札幌区があって札幌市になっていくわけだから、その変化とこの動きと
いうのをわかるようにないと、ただ札幌で大きく括られても、まちの拡大の感じがわから
ない。それが開拓使以降の（６）、（７）の話とも関係するので、その辺をはっきりして
ほしい。また、今のアイヌの話でいうと、この表を見ると、具体的な話がないのが、幕末
の場所制度の中では伏籠川があって、サッポロ場所と上サッポロ場所とフシコ場所とコト
ニ場所というのがあって、それはアイヌのコタンと一致している。そこで大友亀太郎が
入ってきて用水ができてくるということなので、やはり、具体的にアイヌの生活の跡があ
る。札幌のつくり方そのものにかかわってくるので、それを明確にしていくべき。

もう一つ気になっているのが、札幌を語る場合、札幌神社と北海道神宮は離せないと思
う。宗教の問題があるから難しいのだろうけれども、明治四十二、三年までは今の東宮の
場所に宮司さんがいて、今の北海道神宮は建物だけだった。まちのつくり方として意味合
いが変わってくる。

もう一つ、札幌神社について見てほしいのは、明治３２年までは渡御の行列の先頭のほ
うにちゃんとアイヌの人がいる。だから、祭りなどから見ても札幌のあり方というのはわ
かるし、アイヌとの関係もわかるから、札幌神社、北海道神宮というのは、この系列に並
べていいのかどうかはわからないが、入れておいたほうがいいと思う。

○川上委員 ちょっと抜けているかなと思われる部分で、第二次世界大戦の、戦争関連の
もの。戦争遺跡も大分なくなってきたとは思いますが、軍都と言われる旭川に匹敵するよう
な軍隊が札幌にもいたわけなので、屯田兵のところとも関係が深いと思うが、やはり戦争
関連の歴史というものは抜かせないのではないのかなというのは全体を見て思った。

○往田委員 戦争関連ということでは、表現は難しいかもしれないが、接収された建物と
か、知られざる歴史というところがある。でも、そのくらい魅力的な建物だったとか、何
らかの表現があつていいのかなというふうに思った。

それと、アイヌ語地名というのは、とてもよくできている地名だと思う。その土地の
状況を的確にあらわしている意味があり、そこに集落ができてきたということは、アイヌ
の方たちが生活する上でここは何に適している場所、ということをも物すごくわかってい
て生活をされていた。その後、開発が進むわけなので、そういう先人たちの知恵というの
はストーリーを絡めて継承して行ってほしいと思う。

○阿部（一）委員 私も、４０歳になってからアイヌのことをいろいろ勉強したのだ
が、円山と思っていたのは、あれは円山ではなくて、もともとはアイヌがモイワと言っ
ていたのだとか、そのような話も知らなかった。あるいは、何年前だったか、学校のグラ
ウンドの整備をやっているときにアイヌ墓地が出てきたり、苗穂小学校の跡だとか、ある
いは発寒の向こうとかにたくさんある。やはりそういうところにアイヌの先人はいたわけ
で、しかし、そういうことをいろいろ勉強して驚いたが、僕らは学校で、縄文時代があ
つて、その縄文時代から弥生時代だよとかと習ってきたのだけれども、それが北海道には、
弥生時代から江戸時代までないということ、アイヌの先生方の本を読んで驚いた。今は

190万ですごい大都市になったが、150年前はなかった。人がいなかったという話になってしまうので、そういうことを子どもたちに今は教えていないから、そういう歴史を子どもたちはわからない。だから、北海道150年というのは何だという話にもなってしまう。

決して私たちは特別なことを言おうとしている思いはないのだが、地名の話や、こういう自然を大事にして生きてきたという、そういうアイヌの考え方というか、自然観というのはやはり先住民族の知恵に学ぶべきだと思う。

○川上委員 先ほどの調査やアンケートに関連して、歴史資料の今までの把握が余りなかったということは以前から指摘されているが、今回はそういう関係の調査は、郷土資料館などを中心にアンケート、ヒアリングをやるというようなことになっているのかと思う。そのヒアリングの仕方にもよると思うが、そこに寄贈されているものを中心になるのかと思うのだが、まだ寄贈されていない、その地域にある資料というのを、郷土資料館なりに把握しているのではないと思う。難しいかと思うが、その調査のときにはまだ札幌市には所蔵していない、資料館にもないような資料も含めて、ヒアリングをやっていただきたいと思う。

○羽深委員 これも最終的なところの話だと思うが、以前札幌市の文化財保護審議会に出ていたが、結局、こういうことをやっていっても、札幌の小学校や中学校でちゃんと授業をやってくれないと、なかなか伝わらないという話があるので、小学校や中学校の先生が年1回研修会をやるときには、こういうことを説明して伝えてもらうとか、そういう具体的な継承の方法も報告書の最後のほうに入れてほしい。

○樋口委員 今回、文化財をグループごとに分けているが、今後、観光資源化をしていくという観点から見ると、この資料だけ見ると特別目新しいものはない。観光資源として魅力あるのかなと考えると、これはこれで整理をした上で、例えばこういったところを回る循環バスを走らせるとか、何か体験させるようなこと、そんな付加価値をつけていかないと、なかなかこれだけでは難しいかなと感じた。

○西山副委員長 全国でどういうふうはこの歴史文化基本構想と次の観光振興につなげているのか。

○村上調査官 今、私どももそれをかなり考えている。もともと平成19年に歴史文化基本構想をスタートさせたときには、観光という言葉は中に入っていないで、いかにその地域の歴史というものを地域の基準で拾い上げて、何を地域で伝えていくかということをもとめるものであったので、やはりそれを観光に生かしていくというところには、もう一つ工夫が必要になってくるのかなと思う。

今度、歴史文化基本構想を策定して、それを観光に生かしている自治体がどういったことを悩んでいるのかということ、いろいろな自治体の方が来られて話し合うことになっている。ただ単に文化財部局だけでつくって、それが生かされていないということが結構あるので、今、このように観光の方も一緒にこうやって議論していることが多分すごくよ

いことだと思う。

これだけの大規模な都市で歴史文化基本構想をつくるというのはほとんどなくて、今、同じぐらいの規模ということ言えば、名古屋市ぐらいだと思う。これだけ大きい都市だと、まとめるのが大変難しいということも実際ある。そういった中で、これだけ丁寧にまとめていて、できあがるのが楽しみだなというふうには思っている。ただ第3章のこれまでの文化財調査を見ていると、建物に偏っている部分もあるので、そこをワークショップなどで補っていくのだろうと思うが、やはり全部を捉えるということになったときに、その部分の偏りがないようにするというのはぜひやっていただきたい。もちろん、全部の調査が済むわけではなくて、やはりこれは最初のきっかけになるものだが、なるべく網羅できるような形でやっていただきたい。

あと、私は文化庁の前には北海道大学にいたのだが、2012年ごろだったと思うが、札幌まちあるき博物館というのを行った。山口県萩市をモデルにして、まちじゅうを屋根のない博物館にしてまちづくりをしようということで、地域の資源というものを地域の視点で拾い上げるということをしてきた。そのときにもかなり調査したので、そういったものもぜひ共有して、反映させていっていただければと思う。

これだけ資源がある中で、今回の歴史文化基本構想をまとめ上げるということは、すごく大変なことだと思うが、大事なのはつくった後どうしていくかということ。つくったから終わりではなくて、つくるのがスタートと思って、そこからどうしていけるのか、資源がこれだけあるので、拾い上げる仕組みとかもすごく大事になるので、そういったところもぜひ考えながらしていただければと思う。

閉 会